

私を贖う方は生きておられる

ヨブ記 18-19章

はじめに

一昨年から少しずつ旧約聖書の「ヨブ記」を学んでいます。今日は、18-19章に書かれている内容から学びたいと思います。

1. ヨブの試練と信仰

ヨブは、誠実な心を持ち、神様を愛し悪から遠ざかっている人でした。神様は、そんなヨブを祝福して、多くの財産と多くの子どもを与えられました。

しかしそんなヨブに、サタンが目を留めて、神様にこう言うのです。「ヨブは、あなたに祝福されて、多くの財産と多くの子どもが与えられているから、あなたを愛しているのです。もし財産と子どもを失えば、きっとあなたへの信仰を捨てるでしょう」。

そこで神様はサタンに、ヨブの財産と子どもを奪うことを許可しました。するとヨブは、犯罪や自然災害に巻き込まれて、一日のうちにすべての財産と子どもたちを失ってしまうのです。

しかしヨブは、そのような試練の中でも、決して神様への信仰を失いませんでした。彼は、神様を礼拝してこのように言います。「**私は裸で母の胎から出て来た。また裸でかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな**」(ヨブ記 1:21)。

するとサタンはもう一度、神様にこう言います。「ヨブは、財産と子どもを奪われても、健康が与えられているから、あなたを愛しているのです。もし健康を失えば、きっとあなたへの信仰を捨てるでしょう」。

そこで神様はサタンに、ヨブから健康を奪うことを許可します。するとヨブは、足の裏から頭のてっぺんまで、悪性の腫物で侵されるのです。夜眠れないほどの痛みがあり、やせ細っていきます。内臓も侵され、それが原因で体から悪臭が出るようになりました。その結果、人々からも避けられ、ゴミのように扱われます。そして妻からも、「**神を呪って死になさい**」(ヨブ記 2:9)と見捨てられ、ついに妻は神様への信仰を捨てていきます。

しかしヨブは、そのような試練が続く中でも、神様への信仰を失いませんでした。彼は、妻に向かってこのように言います。「**あなたは、どこかの愚かな女が言うようなことを言っている。私たちは幸いを神から受けるのだから、わざわざ受けるべきではないか**」(ヨブ記 2:10)。

2. 三人の友人

ヨブには、三人の友人がいました。テマン人エリファズ、シュアハ人ビルダデ、ナアマ人ツォファルの三人です。彼らは、ヨブが激しい試練の中で苦しんでいると聞いて、ヨブ

を慰めに駆けつけます。彼らは最初、ただヨブのために涙を流し、七日間一言も語らずに、ヨブのそばに寄り添い続けたのです。

しかし三人の友人は、次第に態度が変わっていきます。ヨブ記は全部で42章までありますが、3-31章までは、ヨブと三人の友人との討論が書かれています。その討論は、ヨブの試練の原因は何かという問題を巡っての討論です。

三人の友人は、ヨブの試練の原因を「因果応報」の原理で解釈して、ヨブを教え導こうとします。「因果応報」とは、人は必ず自分の行いによって報いを受けるというものです。善いことをした場合は祝福を受け、悪いことをした場合は裁きを受けるというものです。

三人の友人は、ヨブの試練の原因は、ヨブの罪にあると考えます。そしてヨブがもし罪を認めて悔い改めるなら、試練は終わり、神様の祝福を取り戻せるはずだとヨブを教え導こうとするのです。

3. シュアハ人ビルダデの第二の言葉

8-10章には、シュアハ人ビルダデとヨブの討論が書かれています。18-19章には再びビルダデとヨブの討論が書かれています。

ビルダデは、ヨブの試練の原因は、ヨブの罪にあると考えています。しかしヨブは、これまでの三人の友人との討論を重ねてきても、それを認めていません。ヨブは確かに誠実な心を持ち、神様を愛し悪から遠ざかっている人でした。しかしヨブは、自分には全く罪がないと思っていたわけではありません。ヨブは自分には罪があることを認めています。しかし神様は、ヨブを恵みによって選び、ヨブを祝福してくださっていたのです。ヨブは、善い人間であるから神様に祝福されていたわけではありません。ただ恵みによって神様に選ばれ、祝福されていたから、その恵みと祝福に答えて誠実であろう、神様を愛し、悪から遠ざかろうとしたのです。ヨブは決して「因果応報」の原理で、自分は祝福されているとは考えていません。ただ神様の恵みによって祝福されていると考えていたのです。

ですから今、自分が災いや苦しみを経験しているのも、「因果応報」の原理によるものではないと考えているのです。決して自分の罪が原因ではないと考えているのです。ヨブは自分には全く罪がないと思っていたわけではありません。しかし、一日のうちにすべての財産と子どもたちを失うほど、また健康や妻の信仰を失うほど、そんなに多くの、また大きな罪を自分が犯したとは、どうしても思えなかったのです。

神様はただ恵みによって自分を選び、祝福してくださっていたのに、なぜ突然、神様が自分からすべてのものを奪い、自分をこんなにも苦しめるのか、その理由が分からなかったのです。神様はその理由について教えてくださいませんか。しかしヨブは、恵みの神様が突然自分からすべてのものを奪ったのには、何か理由があるはずだと思ったのです。今、自分が経験している災いや苦しみは決して、「因果応報」の原理で説明できるものではないと考えているのです。

しかしビルダデは、堅く「因果応報」の原理に立って、ヨブが経験している災いや苦し

みの原因は、ヨブの罪にあると信じて疑わないのです。そしてヨブのことを、自分の罪を認めない頑なな人間だと見るのです。そして 18 章では、ヨブを「**悪しき者**」(18:5)、「**不正を働く者**」(18:21)「**神を知らない者**」(18:21)と決めつけて、ヨブを責め立てるのです。

3. ビルダデに対するヨブの言葉

そのようなビルダデに対して、ヨブは 19：2-3 でこう言います。「**いつまで、あなたがたは私のたましいを悩ませ、ことばで私を砕くのか。もう十度もあなたがたは私を辱め、私をいじめて恥じることもない**」。ヨブは、ビルダデを含めた三人の友人の言葉に苦しめられていたのです。彼らは「因果応報」の原理に堅く立って、ヨブの災いや苦しみの原因は、ヨブの罪にある、だから自分の罪を認めて、悔い改めろ、悔い改めろと責め立てたのです。

ヨブはたださえ財産や子どもたちを失い、健康も失い、妻も自分から離れていき、神様も沈黙している、その中で苦しんでいたのに、友人たちからは理解されず、お前が悪い、悔い改めろ、悔い改めろと責め立てられたのです。友人たちは、ヨブを慰め、苦しみから救おうとしていたのですが、結果的にヨブをさらに苦しめることになったのです。

ヨブは、神様が自分を恵みによって選び、祝福してくださったと信じていました。神様を「因果応報」の神ではなく、「恵み」の神と信じていたのです。確かに神様は、罪を裁く義なる神です。しかし神様は、それだけでなく、「恵み」の神でもあるとヨブは信じたのです。つまりヨブは、神様は「義なる神」であると同時に、「恵みの神」でもあると信じたのです。

しかしヨブは、その「恵みの神」である神様が、どうして自分をこのような災いと苦しみに遭わせるのか、分からないのです。ヨブは、神様がヨブの信仰を試すために、このような災いと苦しみに遭わせていることを知らないのです。ヨブが、財産も子どもたちも、健康も失い、妻も友人たちも離れていってもなお、神様が神様であるがゆえに、神様を信じ続けるかどうかを試していることが、ヨブには隠されているのです。神様はヨブに対して沈黙を守られるのです。

ですからヨブは苦しむのです。「恵みの神」がなぜこのようなことをするのか分からずに苦しむのです。そして 19：6 では、「**神が私を不当に扱い、ご自分の網で私を取り囲まれた**」と言って、神様に問題があるとまで言い始めるのです。そして 19：11 では、「**神は私に向かって怒りを燃やし、私をご自分の敵のように見なされる**」と言って、神様が自分の敵になってしまったとまで言うのです。

ヨブは自分が経験している災いや苦しみを、「因果応報」の原理では説明できないと考えていますけれども、「恵みの神」という理解に立っても説明できないと感じ始めているのです。ヨブは、神様を「義なる神」であると同時に、「恵みの神」と信じてきました。どんなに友人たちから、お前の罪が原因だ、お前が悪い、悔い改めろ、悔い改めろと言われても、「恵みの神」には何か理由があるはずだと信じ続けてきました。しかし神様はその理由を教えてくれない、沈黙を守り通している、そして次第にその信仰も揺らぎ始め

て、神様は自分に敵対しているのではないか、神様は自分に怒っているのではないか、神様に見捨てられてしまったのではないかとさえ思い始めたのです。

そのようなどん底の中で、ヨブは自分を「贖う方」への信仰へと導かれていくのです。ヨブは 19：25-27 でこのように言います。「**私は知っている。私を贖う方は生きておられ、ついに、土のちりの上に立たれることを。私の皮がこのように剥ぎ取られた後に、私は私の肉から神を見る。この方を私は自分自身で見る。私自身の目がこの方を見る。ほかの者ではない。私の思いは胸の内です。絶え入るばかりだ。**」

「贖う方」とは、奴隷状態の人を、代価を払って買い取り、自分のものとしてくださる方です。ヨブは、自分には、自分を贖ってくださる方がいるという信仰に導かれたのです。犠牲を払って、自分を苦しみから救い出してくださる方がいるという信仰に導かれたのです。その方は、「私の皮がこのように剥ぎ取られた後に、私は私の肉から神を見る」とあるように、神様です。そして自分が死んだ後にも共にいてくださる方です。そして自分がやがて体のよみがえりをした後に、復活の体を通して見る方ができる方です。

ヨブは災いと苦しみの中で、自分が信じている神様は、「義なる神」であり「恵みの神」であることを信じ続けました。そしてその苦しみのどん底の中で、その「義なる神」であり「恵みの神」は、自分を贖ってくださる方であるという信仰に導かれたのです。自分を苦しみから救い出し、死を超えても、そして世の終わりの時も、自分と共にいてくださる方であるという信仰に導かれたのです。

ヨブは、試練に遭う前も素晴らしい信仰を持っていました。そして試練の只中でも素晴らしい信仰を持ち続けました。しかし試練のどん底の中で、さらに深い信仰へと導かれたのです。ヨブの信仰は、試練の中でずっと一定であったのではなく、試練を通して深められ、強められていったのです。

おわりに

私たちの人生にも、ヨブと同じように突然の災いや苦しみを経験することがあります。その時に大切なのは、私たちが神様をどう見るかということです。神様を「因果応報」の神として見るか、それとも「義なる神」であると同時に「恵みの神」として見るか、さらに私たちの「贖い主」として見るか、です。私たちが神様をどう見るかによって、私たちの人生に起きる災いや苦しみの見え方も変わってくるように思います。

私たちは神様を、「因果応報」を通して見るのではなく、私たちの「贖い主」であるイエス様を通して見ていかなければなりません。イエス様はこう言われました。「**わたしを見た人は、父を見たのです**」(ヨハネ 14:9)。イエス様は、「**恵みとまことに満ちておられる**」(ヨハネ 1:14)方です。イエス様は、私たちが救うために、ご自分の命を代価として払って、私たちが神様との交わりの中に入れてくださいました。その交わりは、死を超えて、世の終わりも超えて、永遠にある交わりです。

イエス様は、十字架と復活によって、私たちのすべての罪を償ってくださいました。神

様は私たちを義と認め、御自身の子どもとして愛してくださっています。

私たちは人生に起こる様々な災いや苦しみの中で、イエス様を通して神様を見ていかなければなりません。そしてそれらを、「恵みとまことに満ちておられる」神様からの試練として受け止めなければなりません。私たちは、それらの試練を通して、信仰が試されます。そして試されるだけでなく、ヨブのように信仰が深められ、強められていくのです。

神様は、試練の中で、その理由を沈黙されるかもしれません。しかし神様は、御言葉を通して、いつも私たちに語りかけてくださいます。ローマ8：31-34にはこうあります。「**神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。私たちすべてのために、ご自分の御子さえも惜しむことなく死に渡された神が、どうして、御子とともにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあるでしょうか。だれが、神に選ばれた者たちを訴えるのですか。神が義と認めてくださるのです。だれが、私たちが罪ありとするのですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、しかも私たちのために、とりなして下さるのです**」。神様は私たちの味方です。私たちを愛してくださっています。イエス様はいつも私たちを弁護し、私たちのために祈ってくださっています。私たちはどんな時にも、この信仰を守り、深め、強めていきましょう。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちの人生には様々なことが起こります。予想もできないことが起こります。しかし神様が私たちを愛してくださっていることには変わりはありません。どうか私たちがどんな時にも、イエス様を通して神様を見ることが出来ますように。そしてイエス様を通して、目の前に起こる出来事を見ることが出来ますように。どうか私たちの信仰を守り、深め、強めてください。

この祈りを、私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。